

動植物の宝庫

犀川源流域

遺伝保存林に

金沢市の犀川源流域の約千八百㊦が来年三月三十一日、林野庁の「森林生物遺伝資源保存林」として選定されることが十日までに決まった。選ばれたのは、全国の十三カ所で、大阪営林局管内では金沢を含めて二カ所。動植物の遺伝子の宝庫と重要な価値が認められたもので、バイオテクノロジーなど学術研究の場としての活用や、イヌワシ、クマタカといった絶滅の恐れがある動植物が生きる環境をそのまま維持、管理するのに大きな役割を果たす。

自然そのまま
保全と研究

来年3月に林野庁

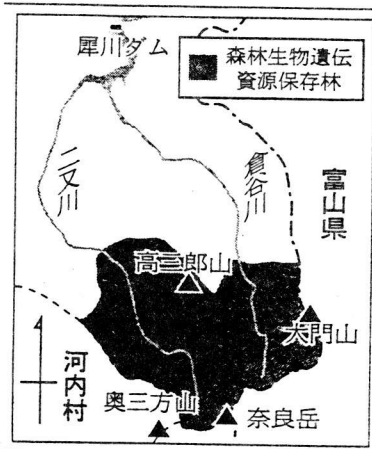
森林生物遺伝資源保存林は、林野庁が種林、伐採主体の林業だけでなく、多様な生物をその環境とともに維持することも国有林の機能の一つとして平成六年に基本計画を策定した。全国の国有林を予備調査し、計画には八甲田山(青森県)、霧島山(宮崎、鹿児島)などとともに犀川源流域が選

定地として盛り込まれた。大阪営林局と金沢営林署による現地調査の後、今年九月からは学識経験者を交えた設定委員会で検討を重ね、九月に開かれた最終委員会でも骨格がまとまった。保存林は県の自然環境保全特別地区、林野庁のブナ等植物群落保護林となっており、八百一十㊦をさらに拡大した区域で、富山県と隣接

する大門山や、奈良岳、高三郎山などに囲まれた千七百九十三㊦。

環境庁のレッドデータブックで絶滅危惧種とされているイヌワシ、クマタカをはじめ、同じくレッドデータリストの準絶滅危惧種で淡紫のかれんな花を咲かせるヒメシヤガなど多種多様な動植物がみられる。今後は登山者に対する入山規制はないものの、山菜取りや魚釣りをしないよう求める看板などを設置する。

岡崎忠美金沢営林署長は「来年十月ごろには、鳥獣保護区としての指定も予定されている。少なくとも明治初期から保たれてきた日本の貴重な生態系であり、国有林野事業への理解が得られるよう、PRしていきたい」と話した。



金沢に猿の群れ

40頭、犀川上流で確認

暖冬異変

子猿の死亡率減少で繁殖



犀川上流域で初めて確認された狼の群れ。中央部分で、体毛の反射による白色で丸く縁取られているのが狼

＝2月11日、金沢市の荦原山付近（滝澤均さん撮影）

金沢市の犀川上流域で、ニホンザルの一群が定住し始めたことが白山自然保護研究会の「日まで」の生態調査で分かった。周辺では、一年前、農作物が荒らされる「遺害」が見つかったが、白山ろく以外で群れの存在が確認されたのは石川県内で初めて。同研究会は、二十年来の越冬で子猿の死亡率が減り、集団の繁殖能力が高まったのが背景とみており、金沢市間部が白山ろくのような猿の楽園になるのか、四十頭前後の今回の群れを絶したうえで生態を詳細に分析する。

白山自然保護研が調査

湯涌温泉
 金沢市
 黒川ダム
 黒川
 狼の群れが確認された流域
 鶴来町
 河内村
 拳原山
 高三郎山
 黒川ダムの背後にある高三郎山は、戦後の狩猟記録や登山客の断片情報から、狼の生息地と言われてき

平成七年十二月、熊野地区でタイノミナを採る者が初めに見つかったことで、自然保護研究会が今年、手付かたつた金沢山間部の調査に乗り出した。

その結果、犀川ダムと熊野地区の間の渓谷で、四十頭前後が確認された。成獣の雄が十頭、雌が十頭、若獣が二十頭、能力も十分で、白山ろこの猿より人慣れしていないという。周辺ではその芽や皮をはいだ「食熊」が少ないうえ、一食熊は少なくとも一年の間に流か下りてきたと推測する。

金沢山間部環境が増えたのは、冬の自然環境の厳しさが暖冬と重なり、越冬した子猿が繁殖に力を入れ始めたためとみられる。白山ろ

九頭、残る子供のうち昨年春に生まれたばかりの赤ちゃんが七頭含まれ、平均規模の繁殖集団となっている。

くでは七十頭前後で群れが分裂する傾向があり、研究会は今後、繁殖状況を見守り、冬場以外の行動範囲をも把握する。石川県内のもつ一つの殖生息地、白山ろくとの交流状況を探るのも今後の課題となっている。

金沢の降雪量
3カ月で75センチ

金沢の今冬の降雪量は三日現在で七五センチなり、暖冬傾向が続く平成以降でも最も少ないことが金沢地方気象台の調べで分かった。観測が始まった明治二十年以降でも四番目の少雪で、同気象台は今後、金沢でまとまった降雪が観測される可能性は小さいとしている。

金沢地方気象台によると、金沢の降雪量は十二月が五センチ、一月が五四センチ、二月が一六センチ。三カ月間の平

年値一九七の四分の一に
とまつてゐる。

こゝまで最も雪が少なかつたのは明治十五年年度の五六、明治十七年度の六六、昭和十三年年度の

今冬、平成で最少に

六五と續き、今冬はこれに次記録的少雪となつて

昨冬の九八と併せ、観測史上初めとなる二年連綿のテラ降雪は確実で、金沢地方気象台防災業務課

は「今冬は寒気が長続きせず、ドカ雪もなかつたので一層、雪が少なくと感じながら、雪が少なうとしたとしてゐる。」

おなじみに降雪量が最も多かったのは昭和元年度の七八二、三八、昭和五年の五八七、また、今冬の金沢の十二、一月の平均気温は五・二度、平年三・四度で、観測史上十一番目の高さとなっている。

今冬、平成で最少に

春の小屋酒場

5月23日(土) 晴

午前6時ダム集合 旧道整備(主に分岐一頂上間)

田村 昭夫(0期) 舟田 節子(15期) 椿川 利弘(18期・日帰り)
梅 典雅(19期)

午前8時工学部キャンパス集合 トイレ構築(配管・基礎工事・枠組)

辰野 隆義(13期) 大島 良治(13期) 吉田 穂積(13期)

上馬 康生(15期) 坂尻 忠秀(15期) 北川 隆次(16期)

清水 重仁(16期) 久富 象二(20期)

24日(日) 曇 9時頃から雨 資材準備(木切り出し・石運搬) 掃除

大島・坂尻…6時引き上げ

梅・久富…8時引き上げ

残り…11時引き上げ



0期 田村 昭夫

拝啓、先日はお世話様になりました。

膝の痛みは全くなり、昨日(27日)会津に帰りました。今後反省して、山下りのトレーニングを積むつもり。

五ヶ条の誓文の草案者は、越前藩の由利公正でした。北陸州立大学法学部を福井に移す理由の一つです。

例の論文は金大理学部物理学科に提出するつもりです。

追伸 来年はサッチャー女史歓迎レセプションに、御主人と参加されまして、日英鉄の女同志の友情を築いて下さい。

13期 吉田 穂積

歯科技工士という仕事から、バイトワックスというものが溜まる。診療室から送られてくる噛み合わせを記録したものである。

何かに利用できないかと考えたところ、原料がパラフィンワックスであり、山小屋でも使え

るローソクが良からうと、ありあわせのもので作ってみることにした。

芯にはティッシュペーパーをこよりにしたもの、ローソクの外形を作るものとしてトイレットペーパーの芯を利用した。

まず水に濡らした紙を敷き、その上に同じく濡らしたトイレットペーパーの芯を立てる。そこに溶融ワックスを流し込み、そのあとのワックスが漏れ出ない為の底を作る。その中に、作っておいだ棒状ワックスを詰め込み、中心にティッシュペーパーのこよりを差し込み、隙間を溶融ワックスで埋める。冷却固化したら、まわりの紙をはがして出来上がり。

春の小屋酒場で使用してみたところ、炎は大きく明るかったのだが、煤が多く、融けたワックスが多量にたれてくるし、芯が伸び過ぎて、時折端折ってやらないと危険を感じる程であった。灯油ランプの芯などは毛管現象の強いものであればそれで良いのだが、ローソクでは先端が燃え尽きて芯の長さが常に一定でないと具合が悪いことに気付かされた。

今度は改良版を持って来よう。

登山道整備最新情報！

18期 椿川 利弘

今春の高三郎登山道整備の参加者は、田村さん、舟田さん、梶君と私の4人と実に淋しいものであった。私自身、高三郎という山が自分たちの山でなくなって久しいOBにとって、登ること自体厳しいのに何故今さら登山道整備をしなければならないのかと言う疑問は確かにあった。しかし、実際作業を始めるとそうゆうことは忘れてしまう何かがあってまた参加した。

午前6時過ぎに犀川ダムを出発して山小屋開きをした後、旧道を登り始めた。標高800mまでの急な登りは相変わらずであるが、登山道は十分整備されていた。その後の稜線沿いについても新道との分岐までは、昨年までの整備のおかげか、歩きながら作業を進めることができる程度の状況であった。

分岐に到着したときには、暑さと空腹で既にバテてはいたが、舟田さんのポッカしてきた冷たいビールとシャーベット状のサラダで昼食をとって元気を取り戻した。いよいよこれからが本番となり、登山道を遮っている木の枝や笹を切り払って高三郎の頂上まで進んだ。

頂上はブッシュで全く展望が利かない。確か5月の山頂は必ず残雪があって展望できたはずである。しかし、考えようによっては、残雪があれば登山道整備もできなかったわけだし、雪のない山頂も実感できなかったのである。登山道整備の一応の完成を喜こんではみたが、白山

や金沢市街地どころか周辺の山々も見えないことが残念でならない。次回現役に頂上のブッシュを刈ってもらえば、登山道整備のやりがいになるし、高三郎の登山者も増えるのではないかなということになった。ただ、一帯は犀川源流の森林保全地域であり、刈りすぎないようにし、ダケカンバは残すように気をつけたい。(梶からの忠告)

帰りは分岐までを手が挙げらなくなるほど更にきれいにした後、梶と私は新道を田村さんと舟田さんは旧道を下りることになった。新道については、成ヶ峰分岐までの痩せ尾根は問題なく歩ける程度に整備しており、その先は非常にきれいに整備が行き届いていた。

ベルクハイムに午後4時過ぎに着いた時にはまだ小屋作業班が一生懸命働いていたが、我々は疲労困憊で手伝う元気はもうなかった。私は日帰りなので一人犀川ダムに向かうことになった。途中、倉谷で出会ったカモシカがご苦労さんと言ってくれたような気がしてとても嬉しかった。

おまけとして、白山の最新の状況も報告することにしよう。

この2週間後の6月7日(日)に日帰りで砂防新道往復の白山登山をした。今年の白山は新聞で報道されているように雪解けが例年より2ヶ月近くも早く、既にクロユリの花が咲いていた。積雪が少ないうえ登山客も多く、もう夏山



の様相であった。私にとって3年ぶりの白山であったが、行きも帰りも標準コースタイムより1時間以上も速く、これも高三郎で鍛えたためではないかと思った。登山道については、室堂から御前峰までは石畳の様に整備されており、何か白山らしくない感じがであった。

嘗て、高三郎と白山はワングルのホームグラウンドであった。しかし、今、新トレは医王山がメインとなっているようである。中高年登山客が増えて、白山が変わって来ているのに、良くも悪くも高三郎は何も変わっていない。



高三郎 TWICE

15期 舟田 節子

<何故か登山道偵察>

ゴールデンウィークの山は…というよりそれ以前の春山からして、今年は散々という様相になってしまった。暖冬のせいで早々と雪が消えてしまったからである。

残雪をもちろんだナカオ山岳会恒例のテン泊山行はお流れとなり、おまけに天気回りも悪くて、せっかくの連休は高三郎の日帰りのみがメニューとなった。私にすれば…3週間後に登山道補修に行く予定の私にすれば、エッよりによって高三郎!?なのであった。北陸にあっては、残雪の白山を筆頭に、それを遠景にしてのタムシバ、シャクナゲ、水芭蕉に飾られた春の低山はどこもかしこも魅力的で、行きたい所だらけなのである。なのに、2回も、あの藪山かいな…。このあたりフクザツ。高三郎は今も「金大ワングルの山」と言われている。それが藪に埋もれて、通い路も定かでなくなって…そう聞いて心傷まない訳はない。こうやって山を続けるなら、金大ワングルのOBですと名乗るなら、

やはり粗末にできない山なのである。藪でパッとしないで、犀川ダムの奥にひっそりと世間隠れすることなく鷹揚に構えている…きっと金大ワングルの訪れを待っているだろうと、そう思ってしまう山なのである。

ともあれ、軽い溜息をついて、登山道補修の「偵察」ができるもんね、で5月4日、高三郎に向かう。ナカオの一行9名様プラス、夫、プラス小6の三男坊の面々。三男坊の方はこの所サッカー漬けで、当方も十分その母として迷惑を被っているけれど、今日はサッカーで鍛えたお御脚拜見とおだてて連れだしてきた。

ワングルの思い出が何層にも重なった山に、こうして今の山仲間や、家族と登りに来るのは結構面映ゆいような気分である。だけど、これ以上の幸せもない。あのワングル時代にこんな日が来るなんて、どう想像できただろう。

結婚や子育ての連続で、もう山なんて大昔の話のように思い込んでいた日常に、突然舞い込んだ25周年山行のお誘い。あれで久しぶりの白山に登って、久々に寄った書店の山のコーナーでナカオ山岳会の本を見つけて、そして出した入会希望の手紙。当時は「女性は未婚」の前時代的な入会規定があって、例外が認められたのはワングルのキャリアのお蔭だったし、四季を通じての山行に何ら気後れしなかったのもワングルのお蔭だった。ひょんなことで日曜ゴロ寝族の夫も山菌に感染し、家族登山もやれるようになった。地図とガイド本を抜けて、夫とあめのこうのと予定をたてている最中にも、ふと夢ではないかと思ったりする。書店の本を手にして手紙を書いたの行動をとったのは私自身だけれど、何もかも、あの、こ汚い字の「金沢大学ワングラーフォーゲル部」の封筒から始まった。それを忘れたことはない。

だから6年前の剣岳の滑落事故の時は、ワングルOBとして何もできない自分が悲しかった。このままではOBと名乗る訳にはいかない。現役をサポートできるOB会を作ろう!

今、40周年にむけて準備を始めている。先日



は若干こじれて、「こんな甘えと怠慢の充満したOB会なんか、潰せばいい」と思ったりもしたのだ。それが、こうしてナカオ山岳会の人達や家族と高三郎へ向かっていると、なおさらあのこ汚い字の封筒を思い出す。見たこともない現役がくれたあのお誘いが、今日のこの日に繋がっている…。やっぱりOB会、やるしかないんだ…。

前日までの雨でダム湖も沢も水量豊か。順当に旧道で登りだす。普段は登っている最中は頭の中が真っ白の私なのだけれど、さすが慣れたシーンばかり。あっちもやったしこっちも…で登って行くのは楽しかった。「ここ伸び放題だったんですよ」と言う時には誇らしくさえあった。三男坊は、「あーあ、物好き」といった顔。バテ気味だった夫の方はそう言い切る余裕はなかったよう。こんなキツイ山の整備に来ているオッカチャンの秘めたる「若さ」に恐れをなしたんだべ。

シャクナゲの花はもう落ちており、分岐近くになって、満開の木も見られるようになった。分岐からしばらくの所の残雪の上で15名くらいのグループが昼食中。その50mばかりの道沿いの残雪の他には、頂上手前の窪みに20m四方の

残雪があるのみであった。したがって頂上もあいかわらずのススタケの藪の中。昨秋、田村教祖様と記念写真を撮ったその場所で、親子三人の記念写真を撮った。

帰りは新道を通る。分県ガイドでは、「新道が通れなかった」の苦情が多く、第2版では旧道往復に内容を変えざるをえなかった。昨年のM氏が整備しているという情報を含め、ナカオでも是非確かめておきたい箇所だったのである。結果は通れた。しっかり鉋で刈り払われ、すでに踏跡が定まりつつある状態だった。三年前にはコシアゲ谷に道ごと落ちている箇所がいくつかあって、枝渡りをしなければならなかったのに、道状態で通過できた。赤布がいくつもついていて、整備にその団体も加わっているものかは判らなかった。

ともあれ3週間後には、例年なら残雪の下のはずの分岐一頂上間が楽々やれてしまうことははっきりした。

朝8時半に出立したダムに帰り着いたのは、午後5時半。「白山よりずっとキツイ」「さすが覚悟のいる山」の感想を、(んだ、んだ、そんな山の整備をやっているのが我が金大ワングルだべ!)と鼻高く聞いていた私であった。



<本番…何故かワンゲル精鋭軍団>

紆余曲折を経て、6時にダムに確実に集合するのは3名となった。食糧をどう運ぶ？結局日帰りで個人装備の少ない椿川さんを当てにして、「大きいリュック持ってきて！」で担いでもらった。作業しながら日帰りで頂上までなんて…現役時代以上の重労働。ご苦労様でした。結果的には梶さんもダム出立時刻に間に合って、4人で倉谷に向かう。

3週間前、鼻高く聞いていたけれど、まあ、これが現実。子供でも登れるし（3週間前、新道で擦れ違った家族連れには、小4の女の子がいた）、40過ぎで山を始めたって（夫のこと）登れる。…どうして、ワンゲルOBにとってこんなに山が遠くなったのだろう？

あの偵察の次の週には、公民館の体育委員の人達14名の講師として大嵐山に登った。その次の週には登山教室の臨時講師で70名を引率して富士写ヶ岳に登った。そこらじゅう中高年登山者だらけなのに…。これがまた責めていると受け止められるんかいな。山が好きでワンゲルが続いた人達なら、中高年グループの先頭を歩いていても…その方が自然のようにも思えるのに。

ナカオも、医王山のナカオ新道の整備をやっている。その日は普段顔を出不さないような会員だって出てくる。誰も「そもそもナカオ山岳会は…」なんて言わないけれど、ここがナカオの原点であって、ナカオの会員と名乗るからには事の優先順位を変えてでも参加すべき山行と皆わかっているのだ。その日は女性軍はナカオのシェフのTさんと三蛇の滝に先行して、リッチな昼食の準備に励むのである。男は男なりに女は女なりにそれなりの役割分担をして「ああきれいな山」「よかったよかった」で酒盛り。楽しい充実の一日だから、さあやるぞと次の年も皆参加してくる。

高三郎だって、金大ワンゲルの原点じゃないか。ダムまで車で入れるし、人数がいれば適宜の分担ももっとやれて、もっと整備し易くなる。

「体育部ワンゲル学科卒」って言ってた人も、

ワンゲルの為（とは言えないが）に留年の憂き目にあった人も…あの頃みんなワンゲル漬けだった。ワンゲルを肯定していたから卒業まで部員でいたのだろうし、OBということになったのだろう。それなのに、高三郎の道が荒れていると聞いても、心傷まないのだろうか？

そんなつい口に出てしまうグチに「いいOB、悪いOBと差別している」なんて返し方をされると、絶句してしまう。今の私の山仲間達は、重たいものもザックにしおぼせて、山頂でのミニ宴会を楽しみ、これ以上の極楽はないよねえ。さあ来週はどこへ行こう…なんてニコニコしている連中ばかりなのだ。「ワンゲル」って、山に登るクラブでなかったんけ？今頃になって、また「ワンゲルとは？」の疑問が頭をもたげてくる。そんな机上のOB論なんてもちろんやりたくもない。「高三郎が荒れているって」「わぁ、たいへん。行こう。」「やろう。」そんな声次々と上がるOB会だったらよかった…。

天気回りがよくなった御蔭で初夏。暑い！高三郎ほど沢音が恨めしく、かつ魅惑的に聞こえる山はない。ゲータレードも麦茶も、ポテトサラダもオレンジも皆凍らせて、それにビールやトマトをドッキングさせてきた。これらで騙しつつ、分岐まで這い上がらなければならない。

田村さん、椿川さん、梶さんは作業しつつ登り、私はその間を休憩・歩行時間に回してもらって、それらのボッカに徹しさせてもらった。分岐に着いた時はもうフラフラ。昼寝タイムにしたいくらい。分け合ったロング罐ビールの100mlばかりが、この世にこんなおいしいものがあるか！だった。丁度金沢に来日中のサッチャーさんにからめ、彼女を高三郎に招待しよう、そうしたら3m歩道があつという間にできるぞ…なんて馬鹿話をしつつの昼食の後、作業にかかる。

ウラジロヨウラク、ヒメシャガ、ヤシオツツジ、そしてもうイワカガミの咲く道を刈り進む。リョウブ、マンサク、クロモジ、タムシバ、ブ



ナの木々と格闘し、頂上へ。相変わらずスス竹の真中の、これ以上登らなくてもいい！だけが取柄の頂上に座り込む。ハエもやたらに多く、コップの中にすぐ細かい虫が浮かび、ほんとに「あーあ」の頂上なのである。この頂上の伐開は、秋の現役にお任せすることにした。

途方もない話であるようにも思えた登山道整備はついに頂上に達した。ちょっと整備の手が入ると、それでルートが定まって踏跡もたちまちしっかりしてくる。手強い思いをした箇所がそうとは気付かないただの道の一部になっているのを見て、「道」というものはつけばみんながそこを歩くんだと今さらのような事実に感動も味わった。

5年前には考えられなかったこと…ホームグラウンド高三郎の伝統が、部のアルバイトとして維持されることになり、小屋もそんな作業の基地として現役が利用するようになった。OBの金脈で資金が調達され、OBの人脈で補助金獲得ができ、OBの技術力で小屋が快適になりつつある。日常の方はグチだらけ、何度も切れているが、やっぱりやってよかったOB会なのである。

<そして酒場編>

下りは慣性の法則に素直な私の方が断然早く、スキーで痛めた足をかばわれてもう片方も痛められてしまった田村先輩が意外な時間をくって

しまわれた。私のもろもろのグチも会津からの「田村です！もちろん高三郎組で参加します！」には、毎度粉碎されている。創部者ならこの部にもいるだろうけれど、教祖であり続ける方は極めて稀に違いない。

そんな訳で小屋に着いた時には、新道経由の拇さん達の方が先に着いており、椿川さんも帰った後だった。5時を過ぎているのに酒場隊の作業の手は止まることなく、久富さん奮闘の釜炊き飯が香ばしいお焦げの匂いを漂わせ始めた。

春とはいえ、一ヶ月早い陽気で、どれだけ食材を現地調達できるかわからない。結局近江町で買ってきて、荷運び人夫がいらないから加工済で持ち込むことにした。10数人分の皮をむいて茹でたり、炒めたり、凍らせたり…3時までかかって5時に起きてになってしまい、高三郎の上りは三週間前とは比較にならないくらいきつかった。こんなこと書かない方が奥ゆかしいし、くどくもなるし、余計尻込みさせもしてしまうのだろう…。私みたいに書かずに、男は黙っての人達も、皆それぞれの無理をして、なおかつそれでも楽しいと参加してくれて、さらには声をかけている小屋酒場なのである。私も「これ何？」「えっ、これも舟田さんが作ったの？」を楽しみにニマニマ、バタバタとやってしまうということなのだけれど…。

という次第で、ウドのきんぴら、きょうぶき、

カタハの含め煮他を並べ、用意してきた山菜で天麩羅にとりかかると、タラノメ、ミツバ、アカシヤの花と現地調達も次々加わる。カタハを炒め、ウバユリのスライスは酢味噌和えとなり、これにメインが牛丼で、冷凍カニの鍋付きである。小屋酒場に参加したら食べ物での文句は言わせぬと、小屋のオバハンとしての誇りにそれなりに燃えてしまうのである。皆においしいといってもらってさらに持ち込んだ量で過不足なしで、ウン今回は95点！なんて自己採点をして楽しんでいる。

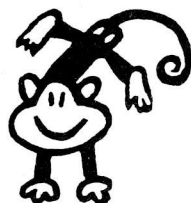
（尚、4期森島さんからの差し入れを食費に流用させていただきました。ありがとうございます。）

ローソクをともせば、寛ぎの酒場タイム。このローソクは穂積さん特製。下界ではつい時間を気にしてしまうが、そんな時計をみなくてもよいことも、テレビの番組はなどと思ひもしないことも小屋のよさなのかもしれない。先程奮闘の排水管の接続など、請求書を出せば10万円を越える作業になるそうで、それを時給の高いOBが、指図するんじゃなくて自分の手でやっているんだからね…で、大笑いしてしまった。辰野さんが設計した仕事を大島さんが施工していたり、その為に打ち合わせをした相手が上馬さんや梅さんのよく知っている人であったり、いろいろな人間関係が重複していることや、その道のプロならではの話も聞けて楽しかった。

ワンゲルにいる時も、ワンゲルがなければ、こんな異学年の人や違う学部の人との交流はありえないとも思ったものだが、OB会をやらなければ、卒業してからのこんなひとときもありませんかった。酒場初参加の久富さんも「まさか卒業して20年もたってから、小屋で酒を飲んだり、石を担ぎあげたりするなんて…信じられない。」と言っていた。

現役時代にも「馬鹿になれ」のセリフが好きな人がいた。「OBの資格は…」とか「勝手に」とか「迷惑」とか…あれこれ言っているより、まず参加して、楽しんでほしいと思う。40周

年をひかえて必然的にミーティングの後半は役員会になってしまった。参加者のほとんどが役員に重複してしまう…これがまたウーンの現実なのでありました。



春の山小屋酒場だより

代表オヤジ 13期 辰野 隆義

ワンゲル（大学ではない）を卒業して25年、またこんなに山小屋にのめり込むことになるうとは思ってもみなかった。

秋の月見の宴での山小屋のさびれ様を目のあたりにした時の気持ちを今も思い出す。久々のベルクハイム。卒業以来20年振りか！昔の懐かしい顔が揃い、若い後輩連中の顔も多数揃っている。皆ワンゲルを中心に集った仲間達だ。

しかし、何かが違う。昔の小屋とは何かが違うのだ。十数年前にリフォームされたとは聞いていたが、それだけの違いではない。昔のようなベルクハイムへの「思い入れ」がないように見えたのだ。小屋の前には残材の山、まわりは草ぼうぼう。水もかまども囲炉裏もなく、昔の小屋を知る人間としては、実に淋しい思いをさせられてしまった。

その時、漠然と、ベルクハイムを何とかしたいなという思いにかられた。そして、同期の数人だけで、時間がかかっても少しずつ、昔のような心安らぐ所にしたいと、連中に話をもちかけた。

ところがいつのまにか、それがOB会の一行事として開催されることになり、ほんの個人的思い入れが前面に出てしまうことになった。そしてさらに高三郎の登山道整備ともからまってしまう、私としてはなんとなく釈然としないな

がらもとにかくスタートした。

その時以来、

96年春 小屋入口道の整備、階段取付

〃 秋 水場の整備

97年春 小屋の石積、基礎モルタル補修

流し・かまどの整備

〃 秋 便所造りに着手。木材の伐り出し

98年春（今回）便所の骨組の組上げ、及び

排水管、給水管の敷設

と、5回の山小屋酒場を開催するうち、あのさびれ感はなくなった。現地の地形を読み、現地の資材を調達しての、ぬくもりと遊び心が漂う空間ができつつある。

「辰野さんは、一生懸命にOB会をされているから…。でも、自分はそこまでやれないし…」の後輩OBの言葉を耳にした。回りから見ればそんなふうに見えるのかな？

この言葉こそ、山小屋酒場のみならず、5年たったOB会のかかえている問題の根源をつくものなのでしょう。

誰かが何かをやらなければ、その会は有名無実のものになってしまう。しかし誰かが頑張れば（私のように個人的思い入れの延長でやっている場合であっても）、ちょっと距離を置いている人は、さらに距離が離れた感じを受けてしまう。活動が具体化し、参加できる機会が増える程、何もなかった時より「参加しない」事実も増えて、かたや活動する人は浮き上がり、か

たや活動しない人はかえって活動しないOBのレッテルを重ね貼りされた気分にもなり、ますます気後れする。

このジレンマに落ち込みかけているのが5年を経た今のOB会だと思うのです。この解消に方法論はあるでしょうか？

「一生懸命OB会をやっている」と見做されている私自身も、日常は忙しさに紛れ、OB会のことなど考えている余裕すらないのが現実です。仕事の内容も、山や自然とは掛け離れた殺伐としたものばかりです。

そんな中で、ああそろそろ山小屋酒場の段取りをしなくちゃ…と思う時には、その時点では不意にギヤを入れ違えたようなプレッシャーがかかるのは事実です。このギヤチェンジのショックは私が社会の現役である限り薄れることはないとも思います。しかし一旦チェンジしてしまえば、今回は何人くらい参加してくれるかなと思いながら、作業の内容を押さえてしています。その時点では酒場での時間を楽しみにしている自分がいるだけで、「頑張らなくては」と悲壮な顔をした自分がいる訳ではないのです。「無理せず、楽しく、迷惑かけず」のモットーの範囲でやっていることだからです。

前回の山小屋酒場参加者は3名（登山道補修隊を加えれば6名）でしたが、それもまた良いのであります。たまたま時間がとれて、たまたま久しぶりに小屋へ行ってもいいなあという人がいて、それらの人が負担にならない程度の



作業ができて、楽しく酒が飲めた…ただそれだけなのです。もし私が小屋酒場の段取りが苦痛になったり、参加者の数に不満を感じるようになったら、オヤジを辞退するつもりです。

重ねて言わせてもらいますが、特別頑張って
いる訳でも、張り切っている訳でもなく、楽しいから、リフレッシュできるから、言い換えれば自分の為にやっている様なものなのです。自分の価値感においてやっていることで、他のOBにとにかく言うためではないのです。では他のOBがどうでもいいかというと、もしこの気持ちをもそのままにわかってくれる人がいて、一緒に楽しくやろうと参加してもらえると、お誘いする姿勢は持っていたいのです。

私自身のOB会への考え方も同じなのです。役員の方々には確かに負担がかかり、曖昧で済まされることが多々あると思います。それでも他のOBに強制はできないし、強制すべきでもない。強制はしないけれど、すべての人にお誘いの声をかける、常に門戸を開いているOB会であって欲しいと思うのです。40年たち、500名もいれば、いろいろな考えの人がいるし、案内を見もしないOBもいるかもしれません。それでも、金大ワンゲルを卒業した人ならば、心の奥には、もう一度ベルクハイムを訪ねてみたい、高三郎に登ってみたい、総会で昔懐かしい顔に会ってみたいの願いがあっていないのでしょうか。何年たっても、思いたって行事に参加した時には、時間を超越して楽しめる、いつでも温かく迎え入れるOB会であって欲しいと思うのです。

私もいろんな所から案内がきます。ワンゲルOB会、金大工業会、高校同窓会、仕事関係の会など、定期的に来るものだけでも7-8通はあります。その中で気に留めるものはワンゲルOB会ぐらいで、後はたまたま気が向き忘れていなければ会費を納入したり、返信をする程度。こんな自分を省みれば、OB会の通信が幾つもの通信の1通に過ぎない人があっても止むをえ

ず、模範生のようなことを言える立場でもないと思うのです。その人その人でワンゲルの意識順位が違うのはどうしようもなく、連絡がないからと責める気にはなれないのです。

しかし現実には、自分の貴重な時間を費やして運営されている方々の多大なる労力があることも事実で、それに対して何らかの方法で意志表示することはエチケットだとも考えるのです。方法はいろいろあると思います。一言通信、会費振込の通信欄、企画への返信、電話、はがき等連絡手段はいろいろあります。ホームページも開設されるそうです。今まで面倒臭かったり、忘れてしまったり、どうしてもよかったです、そんな気後れしている方、ほんの一言でも意志表示して下さい。そのちょっとした行動で、5年目を迎えたOB会のジレンマが、少しでもやわらいでいくのではないかと思います。

話はとんだ方向へ行ってしまいましたが、小屋酒場へ戻しましょう。

今回、昨秋伐り出した木材の小屋組から始めました。簡単なスケッチと、私の頭の中にあることの具象化ですから、100%思いどおりとはいかなかったものの、かなりの出来であるのは確かです。

前回の作業で筋交いのつもりで寸法取りして伐り出した木材が、ちょっと目を離したすきに短く切られて柱にされてしまったり、当初予定の便器の向きが90度変更になったり、それはそれでワイワイ楽しく作業が進んでいきました。

作業の中で意外にきつかったのが、上の方へ腕を上げての筋交い打ちでした。カナヅチを力を入れて打たねばならないのに、30秒と続けられないのです。万有引力に逆らう難しさを痛感した次第です。万有引力に逆らう点ではもう一つきつい仕事がありました。言わずと知れた河原からの砂、砂利、石の運搬です。屈強の成人男子(?)をしても3往復でアゴが上がってしまいます。下界で行う体力年齢測定以上にはっきりと自分の限界を認識できます。体力測定で



自信のある方は是非チャレンジしてみてください。

砂が運び上がった時点でいよいよセメントこねの開始です。と思ったところが、昨春に運びあげたセメント袋が湿気を吸ってカチカチに風邪を引いてしまっていることを発見。一瞬、秋にもう一度あの地獄のセメントボッカをしなければならぬのか！と不安がよぎりましたが、ハンマーで叩いてみるとカチカチなのは外側だけで、中の方は使えそう。ほっと一安心。

早速1グループはセメントをこね、骨組の基礎の部分固定する作業に。もう1グループは排水管、給水管の敷設作業に（さすがにOB会長大島君は本職だけあって、実に鮮やかに作業をこなしていく）。もう1グループは便所に取り付けるドア枠の作成に。と、誰言うともなくさっさと分かれて作業が進んでいく。さすがに皆さん働きざかりの大人だなと実感しました。

1日目の作業は完了。正直言って1日でここまで進むとは思っていなかったもので、大いに満足し、全員に感謝。この分だと明日の作業はほとんどしなくても良いくらい。

当初私が考えていた便器は、半割したパイプを底に埋め込み、コンクリートで回りを固めた形式でしたが、大島君から、どうせやるなら便器を下から持ってこようという提案。陶器の便器のボッカは勘弁してくれということで樹脂製を探してもらうことにしました。思いもかけず立派なものになりそうです。

もう一つ予定変更したものに、汚物処理の方法があります。私はある程度の穴を掘って、そこに溜めることを考えていました。どうせ現在の利用人数は限られているからです。それでもいつかは満杯となるでしょうし、その時に新しく穴を掘って配管もやりかえとなると不可能に近い。それで近くの谷へそのまま放流することにしました。（汚物処理については近年研究も進んでおり、継続課題といった所です。）搬入した材料で、伸ばせる所まで排水管を伸ばしましたが、もう少し下まで伸ばしたく、それは次回酒場に回すことにしました。ともあれ今回は皆やる気十分で、「ご飯ですよ」の聲がかかるまでひたすら作業をしていました。

その後はタイトル通りの楽しい山小屋酒場。お代（労働）は既に前払で払ってあります。おいしい食事と楽しい語らいを肴に酒を飲むだけ。特に春は恒例ともいえる現地調達山菜の天麩羅、酢の物などがでてきて「山小屋」のネーミングが一層輝く感もあります。上馬君や桐君のいる御蔭で、山菜に疎い私が「それ本当に食べれるの？」と思った路傍の草木が、酢味噌で和えられたり、揚げたての衣をかぶって次々と出てくる。ぬめりがあったりしゃきしゃきの食感があったり、春の香りが広がったり…グルメ嗜好の下界なら、結構な器に入り、その分結構なゼロもついて出てくるんであろう…そんな品々

が、ローソクの明かりの元、ほいほい廻ってくる。初めてのものも結構あったので、あるいはまず頑丈なワングルOBで試してみても…の食材も加わっていたのかもしれませんが。もちろんお腹は大丈夫でしたし、こんな所にも卒業してからのそれぞれの年輪がにじみでてきているようで、楽しい山小屋酒場なのでした。

朝に弱い私が寝袋の中でぐずぐずしているうちに、大島君と坂尻君の姿がなくなっていた。大島君は9時には仕事の現場にいないとかならないとのことだったし、お二人さんご苦労さん。

朝食を済ませ、跡かたづけをする人、作業にかかる人と分かれる。昨日思いのほか作業が進み、半日のんびりでも良かったのだが、秋の完成をめざし少しでも作業時間をとることにする。まず石運び。便所は男女共用スタイルとしたので、便器を一段高く設置する為の石が必要だ。コンクリートを少なくする分、結構な量の石が必要になってくる。それと、便所の骨組を支えている一番大事な部分が今一不安定で、それを補強するための丸太も必要である。

小屋周辺のめばしい真っ直ぐな木は昨秋ほとんど伐ってしまったし、もっと奥へ探しに行くのも面倒。と、目の前に丁度よいニセアカシヤがあるではないか。大枝が落ちて小屋の屋根を潰すことがあってみたいへんと、一石二鳥とばかりにチェーンソーでアタック。ところがこれが何とも堅い。四苦八苦の末に伐り出し、寸法に合わせて切断し、端部に丸太を支える為の切り込みを入れる…そのいずれの段階もチェーンソーが踊ってどえらい目にあった。安易な選択をすると、後でえらい目にあうという見本のようなひとこまだった。

それでもどうにか処理して1本支え入れた所で、ポツポツと雨の感触。ここが引き時かと、作業終了。秋の作業に引き継ぐことにする。ホッと一息の皆の目は、快い疲労と、これどんな人になるか?といった楽しさで笑っていた。もちろん私の頭の中では、ちゃんと完成した便所の雄姿が、朝日に輝く大聖堂のごとく、きらきらと見えているのでした。

今回の作業に携わって下さった方々、ご苦労様でした。秋には立派な便所を完成させましょう。その便所を使う第一号は、あなたかもしれません。

